

パネルディスカッション

司会（堂前）：最初に共通の質問にお答えいただき、その後にフロアからの質問に答えていただこうと思います。

まず皮切りの話題として、こうした教育の教育効果について話したいと思います。地域貢献型の教育を受けた大学生の卒業後の進路について、どのような進路や就職先が期待できるかといったご質問をいただきました。これは今の日本の大学にとって切実な問題でもありますし、メディアでもさかんに取り沙汰されています。それは学生にとって自分がどのような人間に成長していくのかということになるかと思っています。

また、同時に大学が市民教育を施した学生たちが社会に入っていて、だんだん増えていったときに、それによってどういう社会がつくられるかという教育効果もあります。どのような人たちがどのような活動をして、どのような社会になっていくかについての予想や理想を述べていただければと思います。こういった教育を進めることで、50年先、あるいはそれ以降の社会について、お話をいただければと思います。

岸：今、和光大学が地域・流域共生センターと、かわ道楽を軸にして進めているシチズンシップ教育、すなわち、流域貢献に基づく環境市民力の育成、これで育った学生はどういう就職があるか。

僕は、読み・書き、そろばん、社交性、自然度、これを現実の社会の課題と切り離れた形で、大学という社会の中で教育するというのは、ある程度可能だと思います。しかし、そうではなく、現実の社会のいろいろな危機を背負っている流域の生態系の枠組みの中で、そういう教育を受けるということが就職にどう役に立つかということが問題です。僕はどういう職業に進んでも、地域のことがよくわかる営業職員などで、必ずや役に立つと思います。ただ、特定の仕事がどこかに準備されていて、このコースを履修するとほかの人より有利にそこに行けるということはありません。

それから50年後のことですが、実は僕が考えていることは冗談ではなく100～300年スパンです。なんで地域貢献に基づく環境市民力といわずに、わざわざ流域貢献に基づくと僕がいつているかというと、地域という形で地球の問題を考える時代は終わったと僕は思っているからです。

いつの時代も知識人というのは、自分が生きている時代は特別の時代で、特別の可能性と危機があると思って仕事をするものですが、人口、資源、食料の危機、地球温暖化の危機、生物多様性の危機、これらを冷静に見通せば本当の文明の危機だと僕は思っています。これをどう乗り越えていくか。乗り越えていくビジョンが二つあると思います。

一つは、民主主義が完全に放棄された形で環境危機が乗り越えられていくシステムが考えられます。いろいろとみんな悪口を言っていますが、結局、土壇場は官僚たちがしっかり設計する制度に従う。彼らを批判する人たちが黙らざるを得ない時代が来て、技術官僚の良識や判断がすべてを動かす時代が来るかもしれません。治水の問題一つとっても、僕はそうなる可能性が極めて高いと思っています。でもこれでは民主主義がなくなってしまう。

もう一方は、民主主義を維持して、市民の意思決定を加えながらそういう環境危機を乗り越えていく道です。これは50年先なのか100年先なのかわかりませんが、来ると思います。そのとき、今、和光でやっているような取り組みをもっと多くの大学がやるようになれば、市民の自由が確保されつつ危機を乗り越えていく道ができる。みんながまともな政治家を選んでいくということです。

なぜ300年かというのは、少し計算に時間がかかります。もし環境市民力（僕はあくまで「環境」というのをつけるのだけれども）育成というのが、社会的・生態系的コンテクストのもとで、読み・書き、そろばん、社交性だけでどんどん推進されるものであれば、もう50年～100年ぐらいで世界はかなりいい状態になると思います。

しかし、そうはいかないというのが、僕の強い主張なのです。自主的に環境活動をする人になるには、小学校3年生前後、10歳前後にしっかりした自然体験・ランドスケープ体験を積んでいないとダメで、こうした体験は決定的に重要だと思っています。そういう体験は、たぶん同年齢集団＝コホートの形成を通して推進される。ということは、集中的にそういう体験をした子たちが、次の親世代になって、子にも体験をさせなければダメだと思ふ年になるのに、30～40年かかるのです。連続的にはいかないのです。仮に30年で1サイクルとすると、倍に増えた子が30年経ったら、またステップワイズに増える。単純に図式的にいうと、1000倍に増えるのに10世代必要で、30年×10＝300年かかるのです。

僕は、こういう講演会で500年、300年と言うと、「大げさに言いたくて言っている」と思われるのですが、指数関数的にいったって、そのくらいかかると思います。その間は本当に苦しい混乱する時代が続くでしょう。これから100年、200年、残念ながら耐えていかなければいけない。

グレース：環境教育をこのまま続けていったって、50年後にどういった社会ができあがるのか、簡単に私の考えを述べたいと思います。

今日ご紹介したサバ大学の地域貢献型の教育には、実はいろいろな専門を持つ

た学生が参加しています。医学部の学生もいれば、経営学部の学生もいます。さまざまな専門科目を学ぶ学生が地域貢献型の授業に参加しているのです。多様なバックグラウンドを持った学生が地域貢献型の授業を受けることによって、将来それぞれの学生が専門領域に進んだときに地域の環境を重視した仕事をしてくれるのではないかと思います。たとえば私はマーケティングを専門にしていますが、私のようなマーケティングを専門にしている学生が環境教育や地域貢献型の授業を経験すると、将来、「環境にやさしい商品」というものを取り上げて世の中に広めていこうというふうになるのではないのでしょうか。

もちろんこうした教育を続けていっても、劇的に何かが変わるということは考えにくいです。しかしマレーシアの環境教育や地域貢献型の教育では、特に都市部で暮らしている大学生が貧しい田舎へ行く機会を持ちます。そこで学生たちは自然の素晴らしさを再認識し、環境保全について考えます。同時に、学生たちは自らが行う環境改善の活動や村人の生活向上への取り組みがその村へどのような良い影響を与えるのかといったことも実地に見ることができます。これは将来、社会を良くしていくという方向につながっていくのではないのでしょうか。

実は、今日紹介した地域貢献型の教育プログラムには、1年生が主として参加します。大学に入ってきてすぐ地域貢献型の教育プログラムに参加した後、2～3年生になって専門教育を受けるわけです。つまり、専門を学ぶときに、環境をどうやって守るのか、地域貢献をどうやって自分の専門分野でやっていくのかといった視点に立って専門の教育が勉強できるわけです。これは非常に良い点ではないかと思います。

パク：期待したいのは、学生たちが社会問題、環境問題を無視することができなくなることでしょう。社会問題、環境問題は、このような教育を受けた学生たち、卒業生たちがいっぺんに解決できるはずはありません。いつの時点でも新しい問題が出てきますし、いつも今現在のところから把握できないような新しい問題がどんどん出て来るはずですが、でも、このような教育を受けている学生たちなら、その新しい問題が出て来たら把握できます。自分がどんな責任があり、自分が何をすればいいかなど、他の人の問題、他の人の責任としてだけでなく、政府に任せただけでなく、自分が他の人と相談しながら、他の人とネットワークをつくりながら対応できます。どうすればいいかを考えられる学生たちや人を育てたいと思っています。

うちの卒業生はいろいろな専門があって、社会科学の専門家、自然科学の専門家、文系の専門家といろいろといて、お医者さんにもなりますし、国連の仕事もやります。たとえば、国連の中で医療を担当する機関に参加して、世界中の困っている人のための仕事をやっている人もいます。ケネディ大統領の時代に作られた平和部隊（Peace Corps）という国際開発のグループなどに入る卒業生も多くいます。弁護士、公務員や、いろいろな仕事をしながら、自分の周りの社会問題に

も参加しますし、海外にも行く。私たちが卒業生の調査を行うときにいろいろとそんな報告をもらいます。

だから、50年先に世界で社会的な問題が減ってくるか、増えてくるかということではなく、いつも社会的に循環していくサイクルが必要でしょう。そういう社会参加する人間をつくっていかないと、もっと悪くなると思いますし、全部が解決できないほど多数の問題があります。

司会：ありがとうございました。現代日本の教育観では教育によって得た知識やスキルというのは本人の利益と考えてしまいがちです。学費も親や本人が負担するというのは、教育によって得るのは本人だというイメージがあるからでしょう。

しかし今出てきたお話からいうと、ある人に高等教育を施すことによって、それが我々の社会を支えてくれて、回り回って社会の構成員の利益になるというサイクルの中で、リベラル教育や市民教育というものを位置づけていくということが共有できるのではないかと思います。

今のお話をうかがっていて私が面白いと思ったのは、1年生のときに現場に行くということです。日本人の感覚ですと、1～2年生のうちは基礎的な勉強を教室でやってから、応用として初めて社会に接するという形のイメージがあるのではないのでしょうか。我々がイメージしている基礎的で抽象的な知識と、実社会の実践的なこと、どちらが先でなければいけないということは、我々日本人の考え方は偏っているのかなということを少し思いました。

岸：読み・書き、そろばん、社交性とお話したのですが、日本の社会はかなり面白くて、小さいときはものすごく社交性を重視するのです。全体の付き合いを重視するでしょう。幼稚園、小学校低学年は集まると仲良しで、友達です。とこ



ろが小学校高学年、中学校、高校生になると読み・書き、そろばんを徹底的に集中して、社交性さえも切断するのがよい子なのです。それもあるから大学に入ると、まずは社会性の回復。もう「一般教養なんかつまらないに決まっているのだから、徹底的に遊べや遊べ」。僕は、これは正しいと思います。そこで社会性を回復しないと、そのまま勉強していったらとんでもない人間ができる。それで流域で環境貢献して遊んで、コミュニティに入る。いいですね。だから、和光大学のかわ道楽はきわめて正しいことをやっていて、特にアメリカやマレーシアと違っていいと思います。

質問：大学が地域貢献というときに、自治体という行政体の枠組みで取り組むのが普通だと思うけれども、岸先生は、なぜ流域という発想転換をしたのでしょうか。

岸：地域というのは、いくら集めても、地球になりません。わかりますか。我々の産業文明が適応しなければいけないのは、地域ではなくて、生命圏という、地球の生命を支える巨大な生態系なのです。その生命圏は、大地、海、空、そこに住む生きものたちで構成されています。そこに適応することを、子どもの頃からしっかり勉強するためには、地域などという抽象的な枠で勉強していたのでは間に合わないのです。

我々が暮らす基盤となる雨の降る大地というのは、人間が細胞でできているのと同じように、流域という細胞でできているのです。どこにでもありますから、流域という枠組みで、そこを構成する社会と生態系のコンテキストで環境訓練を積んでいけば、岡上の小流域、鶴見川の流域で訓練した子が、アマゾン流域でもミシシッピ流域でもたぶん応用ができる。行政区界ではダメなのです。「地域でもいいけれども、流域のほうが面白い、新しい」と言っているのではなくて、「流域でなくてはダメ」というのが、私の主張です。

質問：鶴見川流域のネットワーク活動のよさをイメージできません。同じようなものはあるのでしょうか。

岸：たぶん他にはないと思います。政治的動機でできているのではなくて、この流域が大好きで、この流域に適應する暮らしをしようというのが、不思議なことに何十団体もできてしまった。これは少し奇蹟に近いと僕は思っていますので、よそでまねができるような単純なネットワークではありません。しかし、本気でまねをしようと思ってくだされれば、まねしてもらいたい。

それから、市民が流域に貢献している実感を持てる空間スケールというのは、利根川では大きすぎるのです。これは、流域のとてもありがたい性質で、流域は入れ子構造で行動できるので、大きさは自由に取れます。たとえば和光キャンパスのある小流域は100haぐらいとすると、これを岡上とつなげると、次の大きいスケールになるでしょう。もっと大きくして鶴見川の流域というのは235km²。そ

れで、鶴見川流域全体を扱える人はそれをやればいいし、学生のときは岡上を中心にしようというのでいい。自在にスケールが取れるのは、どこの流域でも同じです。

先日開催された名古屋 COP10（生物多様性条約締結国会議）で、里山がクローズアップされたのに、流域は出なかった。里山アプローチはやがて破綻すると思っています¹⁾。流域思考でやらざるを得ないと思います。河川は国や県の管理下にある自然公物であるため、川をもって行動を起こすには手続きが必要で、一人で突然やろうとすれば複雑なことがたくさんあります。鶴見川流域ネットワークの事務局にお電話をくだされば、必要な対応は教えてあげます。

質問：マレーシアの大学進学率と、サバ大学がおこなっている地域貢献型の教育に、どれくらいの学生が参加しているのか教えてください。

グレース：大学の進学率は、だいたい22%ぐらいです。先ほどもご紹介しましたが、マレーシアには、今、20しか国立大学がございません。したがって、その国立大学に入学するのは非常に厳しい受験戦争になっています。現在、私立大学は200ぐらいあると思いますが、日本と違って、私立大学の設置基準が非常に緩いので、日本の感覚では大学と考えづらいものも大学として登録されています。日本でいうセンター試験のようなものが何段階もあって、それを突破していかないと国立大学に入れません。国立大学へ入るのは非常に難しいのが現状です。

各学期に、いろいろな地域貢献型の教育プログラムが行われています。人数制限をかけているので、だいたい100人以下で参加しています。

質問：サバ大学がおこなっている地域貢献型の教育の予算はどれくらいでしょうか。

グレース：どこに行くのかと、どれくらいの人数が参加するのかによって、予算額が大きく変わってきます。サバ州は広くて、日本の四国と九州を足して、それよりまだ一回り大きいので、どこに行くのかで、ずいぶん予算額が変わっていきます。たとえばジャングルの中に行くのだったら、四輪駆動車を借りなければいけません。そういったことから平均が出にくいので、予算額がいくらというのは申し上げにくいところがあります。川もものすごく大きな川が流れています。ジャングルに入っていく時に車ではなくて船で入っていくこともあります。今でも奥地の川にはワニがいたり、大変なところも多いです。当然、そういった場所に学生を連れていくというのは、非常に危険を伴うので、そのための費用も掛かることがあります。

1) 里山についての岸の議論は以下のサイトに詳しい。

日経ビジネスオンライン「今さら聞けない『生物多様性』保全のホントの話——トキヤバンダ=希少種を守るお話じゃない！ COP10でも登場 『里山』幻想が事実を歪曲？」

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20101022/216790/>

質問：サバ大学の学生の活動はわかりましたけれども、その地域に住んでいる方たちはその地域貢献のためにどんな活動をしているのでしょうか。

グレース：サバ大学が学生を地方に派遣して、地域貢献活動をする時には、必ず村の人たちも参加してくれます。マレー語で「ゴトンロヨン」という言葉があります。「村人が助け合って、何か共同のことをする」といった意味です。そもそも、このゴトンロヨン（相互扶助）の考え方がありますので、サバ大学から学生が行き、たとえば海岸線の掃除をする、村の清掃活動をするといった時には、必ず村の人たちも参加してくれます。

質問：サバ大学が地域貢献する時に、どういったお立場でやっているのですか。サバでパームオイルは産業として非常に重要だが、それは環境を破壊しているということですが、環境重視の立場で行くのでしょうか。それとも、パームオイル産業を守るという立場で行くのでしょうか。

グレース：サバ大学は、どういった立場と考え方で村に行って、地域貢献型、環境重視型の教育をやっているのかというと、実は、私たちの立場を持って行くのではなくて、「行った先の村が何を必要としているのか」を第一に考えて、活動を行うということを大切にしています。「私たちがこれを大事にしているから行く」ということではなくて、行った先の人々が何を求めているのかという立場を大事にしながら、活動を続けています。

一例をあげますと、早稲田大学の学生が毎年サバ州にやってきて、ある海沿いの小さな村に行きます。非常に貧しい村で、電気もガスも水道もないところです。そこに早稲田の学生とサバ大学の学生が一緒に行って活動するのです。実は、まず学生たちがすることは聞き取り調査なのです。村で何を求めているのかということ、最初に聞くのです。そのための調査に相当な時間を費やして、一旦大学へ帰ってくるのです。それで、「こんなことを村の人が求めている」というのを認識した上で、サバ大生と早稲田の学生とで話し合って活動方針を決めるのです。そこで改めて村へ出掛けて行ってから、初めて活動を始めるのです。

また、パームオイルのプランテーションが、今はどんどん広がって行って、それはそれで問題なのですが、政府が規制をかけている限りは、それほど大きな問題になりえないだろうと思います。実は、地元でもっと問題視されているのは、森林の不法伐採です。木を不法に外国に売ってしまうということが横行していて、それで自然災害がひどくなっているとも言われています。そこで森林伐採が引き起こす自然災害を防ぐ活動にサバ大学はより注力しているのが現状です。

質問：アメリカの小中高校では、どのようなシチズンシップ教育が行われているのでしょうか。

パク：まず教育については「アメリカはこうです」と言えません。ご存知のように、アメリカの教育制度は町ごとに決められています。文科省みたいな Depart-

ment of Education がありますが、力はほとんどありません。州の Department of Education でもそんなに力がなく、各町の教育委員会が決めますので、アメリカの全国的な教育制度というものが無いのです。したがって、いろいろな可能性があるとします。ほとんど何も行っていないところも確かにあります。私もそんな高校に行っていました。

自分の子どもの学校などを見ると、たくさんの学校が、先生たちが決めて何かをやるというより、生徒たちのほうから何かをやりましようとなります。例えば、今、長男は中学生なのですが、そこの学校では、例えば食べ物の足りない家族のために、他の人から食べ物やお金を寄付してもらって、それをあげるNPO法人に行って活動している生徒たちがたくさんいます。そして、何かに頑張りますというキャンペーンとか、環境問題についてのキャンペーンなど、いろいろ、生徒たちがやります。

質問：セント・オラフ大学の学生について、もっと具体的なことを知りたいです。専門は何でしょうか。卒業してからどのような仕事につくのでしょうか。

バク：専門はかなり小さい大学なのに多様です。50ぐらいがあります。たぶん、今、一番人気があるのは生物学です。あとは、心理学、数学、文学 (English)、5 番目は経済学、政治学、音楽、いろいろなのです。

そして、卒業してからどんな道に進むのか。お医者さんになる、弁護士になる、NPO法人で仕事をする、公務員になる、企業に入る、なんでもあります。学生たちがいろいろなことをやります。専門にかかわらず、シチズンシップのいろいろな活動に参加する学生たちが大勢いると思います。

セント・オラフ大学生の一つの特徴ですが、たとえば、まじめにお医者さんになりたいと思っても、大学時代にお医者さんのための勉強だけだったらつまらないと思っている学生たちが多いと思います。たとえば、お医者さんのための勉強をやりながら、市民活動的なことをやる。お医者さんの専門の勉強をやりながら、音楽を勉強するなど、いろいろやっているのです。うちの学生たちはいろいろなことで、いつも忙しい。本当に信じられないくらい忙しくて、どうやってみんながやっているか、私はよく把握できません。そんな人たちはすごくエネルギーいっぱいな人が多いです。

司会：ありがとうございます。和光でも地域貢献に携わっている学生は忙しいです。最後に今後、和光大学が市民教育、あるいは社会貢献をやっていこうとするに当たって、こうしたらよいのではないかというご意見がありましたらお願いいたします。

岸：先ほど申し上げたように、鶴見川流域というのは、流域で環境貢献をする市民を育てます。それは、水害、災害に対する対応、汚染の問題、自然保護の問題、地震防災、地域の文化の創造、そういうことを行政と鶴見川流域ネットワーク

キングの二つの組織が全力で必死にやってきました。そういう流域です。そこに一般の市民、企業、大学が参加する。特に和光大学は突出した形で参加してくれています。

この和光大学の次の展開で、僕が期待することがあるとすれば、大学だけではなくて、小学校もすでにいろいろな活動をしているけれども、小学生の流域環境体験活動・体験学習と大学がもっと密接につながって、そういう活動がさらに流域の小学生の体験学習と体験活動をどんどん推進していくような展開を見せてくれたらいいと思っています。

グレース：和光大学にどういったことを期待するのかということで、少しお話しします。和光大学は、すでに過去7年間にわたって、6回、学生をサバ大学のほうに送っています。それで、サバ大学と一緒にいろいろな活動をしています。

日本人の学生が来て、私たちが非常にいいと思うことがあります。サバ大学の学生とサバ州の人たちは自然が非常に豊かにありますから、自然のありがたみや重要性というものを、あまり感謝していないように思われます。日本人が感じているほど、ありがたみを感じていないかもしれません。日本人の学生たちが来て、自然のことをマレーシアの学生にいろいろ語るのも、マレーシアの学生たちが自然環境に恵まれて、これを守っていかなければいけないということに気付かされ、その気持ちを強くするというのもあるのです。

また、和光大学からサバ大学への6回に対して、サバ大学は1回しか学生を送って来ていません。サバ大学の学生がこちらに来て、いろいろなことを学ぶ機会をつくっていただければと思っています。

パク：私のほうからアドバイスというほどのことは申し上げられませんが、よその大学とこのような話題について、もっと連携していくと良いと思います。日本の大学について去年私が調査したところでは、この市民教育で頑張っているところが17ヶ所もありました。それぞれ一つの大学で頑張っているだけでなく、他大学との繋がりがあれば、もっといろいろないい考えやいろいろなことができるのではないのでしょうか。みんなが忙しいことはわかりますけれども、そんなことが可能になれば、いろいろな面白い話や面白い結果が出るのではないかと思います。

司会：ありがとうございます。日本版キャンパス・コンパクトができれば良いですね。サバ州の流域を含めた世界の流域で活躍したりということが可能になっていくのかもしれませんが、だいぶ時間が過ぎて、失礼いたしました。今回は、教育GP「流域主義による地域貢献と環境教育」の仕上げということで、海外の方々も含めて、非常にお忙しい中お越しいただきまして、充実した議論ができました。どうもありがとうございました。